



TITLE:

<1>本科研の概要

AUTHOR(S):

CITATION:

<1>本科研の概要. 京都大学高等教育叢書 2007, 24: 5-18

ISSUE DATE:

2007-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54047>

RIGHT:

I 本科研の概要

研究組織

●研究代表者

平成16年4月～平成19年3月

田中 每実（京都大学高等教育研究開発推進センター・教授）

●研究分担者（五十音順、平成19年1月現在）

荒木 光彦（松江工業高等専門学校・校長）
石村 雅雄（鳴門教育大学・学校教育学部・助教授）
大塚 雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター・教授）
大山 泰宏（京都大学高等教育研究開発推進センター・助教授）
喜多 一（京都大学学術情報メディアセンター・教授）
北神 慎司（島根大学・法文学部・助教授）
小山田 耕二（京都大学高等教育研究開発推進センター・教授）
酒井 博之（京都大学高等教育研究開発推進センター・助手）
神藤 貴昭（徳島大学・大学開放実践センター・助教授）
高見 茂（京都大学教育学研究科・教授）
田口 真奈（メディア教育開発センター・研究開発部・助教授）
田中 耕治（京都大学教育学研究科・教授）
藤田 哲也（法政大学・文学部心理学科・助教授）
松下 佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター・教授）
溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター・助教授）
美濃 導彦（学術情報メディアセンター・教授）
村上 正行（京都外国語大学・マルチメディア教育研究センター・講師）
山内 祐平（東京大学・情報学環・助教授）
山田 剛史（島根大学・教育開発センター・講師）
吉田 文（メディア教育開発センター・研究開発部・教授）
渡部 信一（東北大学・大学院教育情報学研究部・教授）

研究経費

平成16年度	7, 0 0 0 千円	
平成17年度	3, 4 0 0 千円	
平成18年度	4, 0 0 0 千円	合計14, 4 0 0 千円

本科研費を使用して行われた会議、出張等

(平成 18 年 12 月現在)

平成16年度

6月11日～13日 札幌市・北海道大学高等教育機能開発総合センター(大学教育学会第26回大会への参加、情報収集、及び意見交換)

- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 田中每実
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 松下佳代
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助教授 溝上慎一
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助手 神藤貴昭

6月11日～13日 札幌市・北海道大学高等教育機能開発総合センター(大学教育学会第26回大会への参加及び情報収集補助)

- ・京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程 杉原真晃
- ・京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程 辻高明

7月21日～22日 鳴門市・鳴門教育大学(大学授業の質的研究に関する資料収集、教員及び受講生へのインタビュー調査)

- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助手 神藤貴昭

7月21日 鳴門市・鳴門教育大学(大学授業の質的研究に関する資料収集、教員及び受講生へのインタビュー調査)

- ・京都外国語大学マルチメディア教育研究センター 講師 村上正行

7月21日～22日 鳴門市・鳴門教育大学(大学授業の質的研究に関する資料収集、教員及び受講生へのインタビュー調査補助)

- ・京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程 杉原真晃

7月21日 鳴門市・鳴門教育大学(大学授業の質的研究に関する資料収集、教員及び受講生へのインタビュー調査補助)

- ・京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程 辻高明

7月29日～30日 京都市・京都大学高等教育研究開発推進センター(授業評価に関する研究上の打ち合わせ)

- ・大学評価・学位授与機構評価研究部 教授 大塚雄作

8月2日～5日 熱海市・旅館大月ホテル(授業の質的研究のためのワークショップへの参加及び

事例検討)、高山市・高山市民文化会館(数学教育協議会第52回全国研究大会への参加、学力評価の方法についての発表及び資料収集)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 松下佳代

8月8日～18日 北京市・北京国際会議センター(第28回国際心理学会議における資料収集)、ハルビン市・ハルビン鉄路第一高等学校、ハルビン工業大学、黒龍江大学、ハルビン師範大学(中国の大学における授業研究に関する調査)、大連市・遼寧師範大学、大連外国語学院、東北財経大学(中国の大学における授業研究に関する調査)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 助手 神藤貴昭

8月24日～30日 ワルシャワ・ルブリンカトリック大学(Third International Conference on the Dialogical Self / 第3回対話的自己に関する国際会議への参加、発表及び資料収集)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 助教授 溝上慎一

9月2日～3日 京都市・京都大学高等教育研究開発推進センター(心理学の知見をふまえた大学授業研究に関する打ち合わせ)

・法政大学文学部 助教授 藤田哲也

9月10日～11日 吹田市・関西大学(関西大学国際シンポジウムへの参加及び学習共同体の生成について資料収集と意見交換)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 松下佳代

9月10日～11日 東京都・早稲田大学西早稲田キャンパス(日本特殊教育学会第42回大会への参加及び資料収集)

・東北大学大学院教育情報学研究部 教授 渡部信一

9月18日～20日 東京都・日本大学文理学部百周年記念館(教育思想史学会への参加及び資料収集)、東京都・東京大学(電子メディア化に関連する資料収集)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 田中每実

9月22日～25日 東京都・東京工業大学(日本教育工学会第20回全国大会への参加及び資料収集)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 助手 神藤貴昭

9月22日～25日 東京都・東京工業大学(日本教育工学会第20回全国大会への参加及び資料収集補助)

・京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程 杉原真晃

・京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程 辻高明

9月27日～28日 京都市・京都大学高等教育研究開発推進センター(授業評価に関する研究上

の打ち合わせ)

・大学評価・学位授与機構評価研究部 教授 大塚雄作

11月7日～8日 福島市・福島大学(大学授業ネットワーク・コンテンツ作成のため、人間発達文化学類の小野原雅夫氏の授業観察・記録及び、検討会への参加)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 松下佳代

・京都大学高等教育研究開発推進センター 助教授 溝上慎一

11月19日 浜松市・アクトシティ浜松コンgresセンター(高等教育機関における新しい教育システムの実践に関する部会司会及び研究打ち合わせ)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 田中每実

11月26日～27日 京都市・京都大学高等教育研究開発推進センター(大学授業ネットワーク座談会)

・福島大学人間発達文化学類 助教授 岩崎紀子

・福島大学人間発達文化学類 助教授 小野原雅夫

1月26日～28日 滋賀県・近江舞子ホテル(本科研中間報告会への参加)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 田中每実

・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 大塚雄作

・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 松下佳代

・京都大学高等教育研究開発推進センター 助手 神藤貴昭

・京都大学高等教育研究開発推進センター 教務補佐員 酒井博之

・京都大学大学院工学研究科 教授 荒木光彦

・慶應義塾大学文学部 教授 松浦良充

・メディア教育開発センター 助教授 田口真奈

1月26日～27日 滋賀県・近江舞子ホテル(本科研中間報告会への参加)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 助教授 溝上慎一

・京都大学高等教育研究開発推進センター 技術補佐員 山田剛史

・京都大学学術情報メディアセンター 教授 喜多一

1月27日～28日 滋賀県・近江舞子ホテル(本科研中間報告会への参加)

・東北大学大学院教育情報学研究部 教授 渡部信一

2月11日～12日 広島市・鈴峯女子・中学高等学校(教育効果の質的評価に関する発表及び資料収集を行う)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 松下佳代

2月16日 鳴門市・鳴門教育大学(遠隔授業実践の質的研究法に関する会議及び資料収集)

- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 田中毎実
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助手 神藤貴昭
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 教務補佐員 酒井博之
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 技術補佐員 山田剛史
- ・京都外国語大学マルチメディア教育研究センター 講師 村上正行

2月16日 鳴門市・鳴門教育大学(遠隔授業実践の質的研究法に関する会議及び資料収集補助)

- ・京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程 杉原真晃

3月21日～23日 京都市・京都大学高等教育研究開発推進センター(第11回大学教育研究フォーラムへの参加及び情報収集・研究打ち合わせ)

- ・東北大学大学院教育情報学研究部 教授 渡部信一
- ・法政大学文学部 助教授 藤田哲也

平成17年度

6月10日～12日 京都市・京都大学高等教育研究開発推進センター(大学教育学会第27回大会への参加、及び新しい資料の収集とこれまでの研究成果についての討議)

- ・法政大学文学部 助教授 藤田哲也

7月20日～21日 鳴門市・鳴門教育大学(遠隔教育演習受講生へのインタビュー)

- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助手 酒井博之
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 教務補佐員 山田剛史
- ・京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程 杉原真晃

9月5日 京都市・京都大学高等教育研究開発推進センター(遠隔ゼミKNVプロジェクト総括のための研究会)

- ・徳島大学大学開放実践センター 助教授 神藤貴昭
- ・鳴門教育大学高度情報研究教育センター 助教授 曾根直人
- ・鳴門教育大学学校教育学部 教授 山崎洋子

9月23日～25日 徳島市・徳島大学(日本教育工学会第21回全国大会への参加及び資料収集)

- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助手 酒井博之

1月19日 名古屋市・名古屋大学(FDネットワークに関するインタビュー調査実施)

- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助教授 溝上慎一

1月24日～26日 滋賀県・近江舞子ホテル(本科研中間報告会への参加)

- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 田中每実
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 大塚雄作
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 松下佳代
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助教授 大山泰宏
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助教授 溝上慎一
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助手 酒井博之
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 教務補佐員 山田剛史
- ・京都大学大学院工学研究科 教授 荒木光彦
- ・メディア教育開発センター 助教授 田口真奈
- ・青山学院大学文学部 教授 今井重孝

1月24日～25日 滋賀県・近江舞子ホテル(本科研中間報告会への参加)

- ・徳島大学大学開放実践センター 助教授 神藤貴昭
- ・島根大学法文学部／教育開発センター 助教授 北神慎司

2月2日～3日 名古屋市・名古屋大学(FDネットワークに関するインタビュー調査実施)

- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助教授 溝上慎一

2月24日 東広島市・広島大学(COE国際ワークショップ「学位課程のカリキュラムモデルに関する多国間分析」への参加及び資料収集)

- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助教授 溝上慎一

3月2日～3日 松江市・島根大学(Web を利用した公開授業・授業検討のシステム構築に関する打ち合わせ、及び試行)

- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 田中每実
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助教授 大山泰宏
- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 助手 酒井博之

3月4日～6日 伊東市・伊豆高原桜美林クラブ(電子メディアを用いたFDに関する研究協議)

- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 田中每実

3月12日～14日 長崎市・長崎大学大学教育機能開発センター(長崎大学におけるオンラインFD及び授業評価などのFDの実状について、関係者を訪問、面接調査)

- ・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 大塚雄作

平成18年度

6月16日～17日 松江市・島根大学松江キャンパス(Web 公開授業の打ち合わせ)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 教務補佐員 山田剛史

8月4日～5日 松江市・島根大学松江キャンパス(Web 公開授業の実施に関する打ち合わせ)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 田中每実

・京都大学高等教育研究開発推進センター 助教授 大山泰宏

・京都大学高等教育研究開発推進センター 助手 酒井博之

11月3日・5日 高槻市・関西大学(日本教育工学会第22回全国大会への参加及び資料収集)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 助手 酒井博之

11月4日 高槻市・関西大学(日本教育工学会第22回全国大会への参加及び資料収集)

・京都大学高等教育研究開発推進センター 助教授 大山泰宏

本科研による研究の公表状況

(1) 学会誌等

- 酒井博之・田中毎実(2005) 遠隔連携ゼミにおける学びの構造化. 京都大学高等教育研究 第11号, pp33-66.
- 杉原真晃(2005) 遠隔授業におけるコミュニケーションの特徴と学生の学びの検討. 京都大学高等教育研究第11号, pp67-81.
- 神藤貴昭・酒井博之・山田剛史・村上正行・杉原真晃(2006) 京鳴バーチャル教育大学実践における受講生の「フレーム」変容. 日本教育工学会誌, 30(Suppl.), pp113-116

(2) 口頭発表

【学会発表】

- 神藤貴昭・村上正行・田口真奈(2003) 京鳴バーチャル教育大学(KNV) 実践における学び. 日本教育工学会第19回全国大会.
- 村上正行・神藤貴昭・曾根直人(2003) 遠隔ゼミにおける受講生のメディア活用. 日本教育工学会第19回全国大会.
- 杉原真晃・神藤貴昭・村上正行・辻高明(2004) 遠隔・議論型授業における学生の自生的学び—京鳴バーチャル教育大学(KNV) 実践を通して—. 日本教育工学回第20回全国大会.
- 村上正行・神藤貴昭・杉原真晃・辻高明・曾根直人(2004) コミュニケーションを意識させる遠隔ゼミの授業デザイン. 日本教育工学回第20回全国大会.
- 曾根直人・村上正行・神藤貴昭(2004) テレビ会議システムの構築と運用. 情報教育研究集会.
- 杉原真晃・神藤貴昭・村上正行・曾根直人(2004) テレビ会議システムを利用した授業における学生の自生的な学びの生成. 情報教育研究集会.
- 谷村千絵・石村雅雄・山崎洋子・三宮真智子(2004) 情報教育における学びの質—京鳴バーチャル教育大学(KNV) の授業から—. 情報教育研究集会.
- 神藤貴昭・村上正行・杉原真晃・辻高明(2004) 京鳴バーチャル教育大学(KNV) 実践における学び(2). 日本教育工学会第20回全国大会.
- 神藤貴昭・村上正行・河合紀子(2004) 京鳴バーチャル教育大学(KNV) 実践における電子掲示板の使用. 日本発達心理学会第15回大会.
- 酒井博之・山田剛史・神藤貴昭(2006) 遠隔協調学習における学びの構造の構造化—オンライン非同期ツールの利用に着目して—. 日本教育工学会第22回全国大会.
- 大山泰宏・酒井博之・田中毎実・北神慎司(2006) Web を利用した公開授業システムの構築. 日本教育工学会第22回全国大会.
- 村上正行・山田剛史・酒井博之・神藤貴昭(2006) 主体的な学びを目指した遠隔ゼミにお

けるメディアの影響. 教育システム情報学会.
山田剛史 (2006) 遠隔協調における学びの創成－授業の「転機」をめぐる通時的・共時的
視点－. 日本教育心理学会第 48 回総会.

【シンポジウム等】

第 13 回 京都大学大学教育研究フォーラムラウンドテーブル企画 遠隔授業を通して見
えてきた大学教育の未来. 2006 年 3 月 28 日 京都大学

話題提供

酒井博之 オンラインとオフライン, 同期と非同期の狭間で.

村上正行 コミュニケーションの観点から捉えた遠隔教育と高等教育.

山田剛史 共時的・通時的視点から捉えた学びの変容過程: ボトムアップ的教育論の
組織化に向けて.

神藤貴昭 <継続>のある学生主導型授業: 高等教育と生涯教育との接続へ.

指定討論

中原 淳 (東京大学大学総合教育研究センター)

大山泰宏 (京都大学高等教育研究開発推進センター)

(3) FDに関する情報アーカイヴ

【大学授業ネットワーク】

- No.021 小野原雅夫 (福島大学人間発達文化学類) 倫理学概論 I・II・III
No.022 長谷川元洋 (金城学院大学現代文化学部) 教育情報学講義 III
No.023 木野茂 (大阪市立大学大学教育研究センター) ドキュメンタリー・環境と生命
No.024 喜多一 (京都大学学術総合情報メディアセンター) 創造・学習・コンピュータ
No.025 清水豊子 (千葉大学教育学部) 言語コミュニケーション教育
No.026 清水豊子 (千葉大学教育学部) 英米文学セミナー
No.027 関田一彦 (創価大学教育学部) 情報教育論
No.028 関田一彦 (創価大学教育学部) 総合演習
No.029 金岡正夫 (鹿児島大学教育センター) 英語コアO
No.030 加納寛子 (山形大学学術情報基盤センター) IT 社会は持続可能であるか

【大学授業座談会】

- No.003 溝上慎一 (京都大学高等教育研究開発推進センター) 2004.7.6.実施
大学における学びの探求 (1)

3年間の研究の流れ

1. 研究の概要

本研究は、「大学授業の質的研究」「電子ネットワーク化」という2つのテーマをめぐって、研究分担者および協力者によって推進されてきた。本報告書をはじめににあたって、その概要を示すとともに、本報告書を読み解く指針ともしたい。

京都大学高等教育研究開発推進センターでは、平成13年度から平成15年度にかけて、同じく科学研究補助金基盤研究(B)(2)の「バーチャルユニバーシティ構築の基礎づけに関する総合研究」(「前科研」と略称)をおこなった。この研究は、オンライン上に展開される高等教育の学びの場について、その成立要件を、教授－学習の観点から明らかにしようというものであった。当時ITによる国家再生が声高に叫ばれ、高等教育にも従来の対面型教育に変わるもの、もしくは補完するものとして、e-Learningの導入が急速に模索されていた時期であり、物理的なキャンパスをもないバーチャルユニバーシティに関して、日本での実現がはじまった時期でもあった。と同時に、米国においては、いくつかのバーチャルユニバーシティの経営不振や閉鎖が次第に明らかとなりつつあった。そのような流れの中で、あらゆる教育機能をそこにオンラインに回収していくのではなく、教育分野や学習スタイルとの関連から、あるいは教育コンテンツとの関連から、オンライン教授法という「形式」に適切な「内容」を吟味したり、オンライン教育の限界性に関して顧慮がおこなわれるようになっていたという背景がある。

前科研では、そのような流れを意識しつつ、オンライン教育の可能性と限界に関して研究するものであった。ただし、「限界」に関して明らかにするのは、容易ではない。ICT機器の進歩はすさまじいものがあり、また猛烈なスピードでその使用は私たちの日常生活の一部を構成するようになってきている。私たち自身が大きな流れの中にいるとき、私たちは自分自身が置かれている流れを立ち止まって対象化するのは容易な作業ではない。「バーチャルユニバーシティ構築の基礎づけに関する総合研究」におけるKKJ実践(慶応－京都連携ゼミ)に関しては、オンラインとオフラインとの適切な組み合わせは、教養教育として、オフラインのみでは得られない教育効果をもたらすことができる、ということは3年間の実践研究によって明らかになってきた。しかしながら、オンラインのみでそれが可能かどうかということに関しては、私たちは十分な実践的な基盤を持っていなかった。オンラインのみによる教育実践研究として計画されたKNV実践(Kyoto-Naruto Virtual University:京鳴バーチャル教育大学)は一年目を体験したばかりであった。

2. K N V 実践

本科研「大学授業実践の質的研究にもとづく電子メディア化とFDネットワークの構築」は、前科研で出てきた疑問、すなわち、オンラインのみの教育環境において、どのような

教育がどこまで可能であるのか、そして、それが可能であるための諸要件はどのようなものであるのかを明らかにしようとするものであった。本科研の1年目と2年目に、KNV実践のそれぞれ2年目と3年目がおこなわれた。KNVの実践とその成果は、本科研の前半において中心的なものであり、多くの学会でその成果が発表され、また学術論文が執筆された。そこでの研究の視点は、大きく次の3つに分けられる。

1) KNVの環境のもとでの学生の学びについて

神藤・村上・田口(2003)「京鳴バーチャル教育大学(KNV)実践における学び」／神藤・村上・杉原・辻(2004)「京鳴バーチャル教育大学(KNV)実践における学び(2)」／杉原・神藤・村上・辻(2004)「遠隔・討論型授業における学生の自生的学び—京鳴バーチャル教育大学(KNV)実践を通して—」／杉原・神藤・村上・曾根(2004)「テレビ会議システムを利用した授業における学生の自生的な学びの生成」

これらの研究は、KNVの環境(後述)のもとで、授業中の学生の行動の観察、毎回の授業後の学生と教員による振り返り、電子掲示板への書き込み、授業のターム終了後の学生へのインタビュー、などによって得られたデータをもとに、学生の学習の経過、教員の介入の在り方を明らかにし、学習経験の場としてのこの授業における学生の学びの様相について研究したものである。

2) 学生のメディア活用行動やリテラシーの獲得に関するもの

村上・神藤・曾根(2003)「遠隔ゼミにおける受講生のメディア活用」／谷村・石村・山崎・三宮(2004)「情報教育における学びの質—京鳴バーチャル教育大学(KNV)の授業から—」／村上・神藤・杉原・辻・曾根(2004)「コミュニケーションを意識させる遠隔ゼミの授業デザイン」

これらの研究は、ビデオチャット、電子掲示板、テレビ会議システムといったメディアの使用に関して、学生の行動の変化、メディアへの適応、その過程を通して学生が獲得したリテラシー等に焦点を当てた研究である。もっともリテラシー獲得は、単なる技術的な熟達を意味するのではなく、学習者の認知的枠組みの変化といった内面的な変化も伴うものであり、とりわけKNVにおいてそれは不可分の学習の要素として組み込まれている。さらに、KNVではビデオチャットという限定された場を用いることによって、私たちの日常のコミュニケーションへのリフレクションももたらすものである。

3) KNVのシステムの構築について

曾根・村上・神藤(2004)「テレビ会議システムの構築と運用」／神藤・村上・河合(2004)「京鳴バーチャル教育大学(KNV)実践における電子掲示板の使用」

これらは、KNVの場を構成する電子メディアである、テレビ会議システム、電子掲示板、ビデオチャットといったシステムの構築に関する技術的な含意、また、その評価に関するものである。KNVで使用されたシステムのコンセプトは、できるだけ日常的に使用できる安価な機器とインフラを使用するというものである。大きな施設や巨額な投資が必要な回線や高精度の画面ではなく、パーソナルコンピュータと市販の映像・音声機器を使用して、日常的で継続的に使用可能な教育環境を構成するということに目標が置かれていた。

3. 大学授業アーカイブと大学授業座談会

本科研の研究計画の大きな柱である、大学授業の質的研究と評価、電子メディア化に関しては、「大学授業アーカイブ(旧 大学授業ネットワーク)」のプロジェクトを中心におこなわれた。これは、全国の大学の授業のうち特徴ある実践に関する紹介や記録を、自薦・他薦を問わず広く募集し、当科研のプロジェクトチームにより一定の審査とやりとりを経た後、Web上に公開して、全国の大学教員の研修のための資料とするとともに、大学授業研究の基礎的なデータとするものである。当科研がスタートする以前からすでにスタートしていたプロジェクトであるが、当科研の援助を得て、この3年間で合計10本の授業を収録することができた。

授業の選択の観点は、おおむね、1) 授業設計、ツール、教授法などの点で特徴的なものがあるか、2) 他の大学授業の実践者の授業改善・向上に資するところがあるか、というものであった。これは、その授業実践の質的な評価ということでもある。また、Web上に掲載する形でまとめることは、授業者にとっては一種のティーチング・ポートフォリオを作成することであり、この点、評価の手法の開発へと寄与するものであった。

授業のピアレビューを通した、授業の質的研究としては大学授業座談会がある。これは、授業公開の後に、当該授業について授業検討会を開催し、その記録を電子ネットワーク上に公開するものである。公開授業と授業検討会は、本科研の中心組織である京都大学高等教育研究開発推進センターにおいて、すでに11年以上の実績がある。しかしながら、本科研のプロジェクトに着手する以前は、それを電子ネットワーク上で公開するということとはしてこなかった。この3年間では初年度に、当センターの溝上氏の授業が公開され、大学授業座談会がおこなわれた¹。この授業は、大学授業アーカイブにも記録されている授業であり、実際にそれを授業参観することで、大学授業アーカイブにおける記述に関して、また大学授業アーカイブ自体のあり方についても、検討するきっかけとなった。

¹ 2年目以降も大学授業座談会自体はおこなわれたが、特色GP「相互研修型FDの組織化による授業改善」の事業へと移行したため、本報告書には掲載していない。

4. 大学教育ネットワークと Web 公開授業

大学授業の質的研究と電子メディア化ということで、大きな転換があったのは、「大学教育ネットワーク」と「Web 公開授業」が開始されたことである。

大学授業アーカイブは、それ自体で相互研修のためのデータベースとして意味があるものである。このアーカイブには、2006 年の実績で月に 100 から 200 のアクセス²がある。また、月に 2 回ほどであるが、米国、オーストラリア、イタリア、ブラジルなどの国々からのアクセスもある。

しかしながら、特徴のある授業に関する紹介だけでは、どうしても授業改善の営みの中の一部の方略でしかないという限界がある。そこで、大学授業アーカイブに加え、他にも教員の授業改善の営みのための統合的な情報を提供すべく「大学教育ネットワーク」が構想され実現された。これは、①各自の授業実践の記録やツールを持ち寄り紹介しあい、異なる大学や遠隔地にいる大学教員どうしの交流をうながす「大学授業データベース」、②毎年本センターが主催している、大学教育改善に関する実践研究報告の場である大学教育研究フォーラムの発表記録等を保管しておく「大学教育フォーラムアーカイブ」、③京都大学固有の教育問題に即して、学内向けに教育改善のための情報を発信し交流する「学内 FD データベース」、④各自の授業を撮影した映像（動画）を公開し、電子掲示板上で授業検討会をおこなう「Web 公開授業」から構成されている。このネットワークは、こうした複数の領域の情報を提供することによって「e-Learning を含む日常的 FD 活動の現状の全体を俯瞰させて、自分たちの FD 活動の新たな組織化を促し、こうして促された活動の履歴を蓄積し、それによってさらに新たな俯瞰を可能にするという、循環的な相互研修サイクルの生成をめざす」ものである。いわば、大学教員の e-Learning のための統合的な場を作成しようというものである。

その中の Web 公開授業は、とりわけ、電子メディア上に展開される相互研修の場としてのメリットを最大限に利用すべく構想されたものである。そこでは、互いに地理的に離れた授業者どうしが、自分たちの授業の実践の記録を持ち寄り、議論できる相互研修の場を形成することがめざされている。ここでは、自分で記録し記述した授業の情報ではなく、授業の映像をみることができるので、自分の授業の解釈の仕方、見方、脈絡化の仕方などもリフレクトされることとなる。また SCS 等と異なり、ブロードバンド環境と PC さえあれば、自宅からも視聴でき授業検討に参加できるという、メリットもある。次年度以降は、この大学教育ネットワーク、Web 公開授業を中心として、大学教員のための e-Learning という観点から、相互研修の場の形成について検討されることであろう。

以上、3 年間の研究の流れをおおまかに述べてきた。研究の実際に関しては、これ以降の研究業績の再録を参照されたい。

(大 山 泰 宏)

² ユニークアクセスに限る。すなわち、同一日に同一 IP アドレスからのアクセスは除いている。